

大野市における地下水をめぐる人の意識

細羽 祐子

本論文は福井県北東部に位置する大野市をフィールドとし、地下水に関する利用実態と住民意識を調査したものである。大野市は人口4万人の小規模な都市である。大野盆地と呼ばれる地下水盆をもち、その中で、地下水の湧き出す地帯が市の中心区となっている。住民や市内の工場ではこの地下水を直接汲み上げ、無料で利用している。この水は良質なため、名水百選にも選ばれている。近年、市内では地下水の涵養量の低下と使用量の増加による地下水位の低下、有機溶剤による水質汚染など、地域にかかせない水に問題が発生している。

この現状を踏まえ、地域の人々は水に対してどういった意識を持ちつつあるか、という点に着目し、聞き取り調査を行った。また、大野を訪れる観光客（大野市内で1泊以上する人のみ）を対象にアンケート調査を行い、同じ様に水に関する意識調査と、観光地としての大野の位置付けに関して探ってみた。

観光客に対するアンケート調査からは、この土地が2、3泊程度の小旅行の中の訪問地として位置づけられ、ガイドブック、本で知って来る人が多いことなどが分かった。地下水については、維持の難しくなっている大野の地下水の現状を知っている人はかなり少なく、御清水おしよすずが日本の名水百選に選ばれていること、生活用水として今も市民が無料で汲み上げて利用していることについての知名度は順に低くなっている。

市内の住民に対する聞き取り調査からは、次の様子が分かった。①井戸枯れ、水質汚染が発生し始めた昭和40年代後半から、住民の意識は

「何時でも手にはいるもの」ではなく「有限な必需品」というように変わり始めている。特に地下水位の低い市南部地区は現状維持のための地下水保存運動が活発化している。②地下水は近年の“おいしい水”ブーム、さらに昭和60年に名水百選入りした事からその付加価値が高まり、住民の水に対する誇りや愛着、といったものをさらに深める傾向をもたらしめている。③地下水を資源化し、同時に管理するという市の水行政政策が進行している。法的管理の厳しい河川水と対照的な地下水を、広い土地と合わせて工場誘致のうたい文句にし、PRしている。また観光資源化する動きも活発化している。水質と水量の確保に対応するため、上流の地下水を水源とした上水道の建設が計画・実行されたが、水源より下流の水質管理に対する不安や、水道料金制への不満などから加入率は対象戸数の約9パーセントとかなり低い状態となっている。

大野市は地下水涵養地域を含め、盆地全体が1つの行政区であるため、地下水管理や、それにそった開発を考えるのには、そう不都合はないと考えられる。地下水を水源にした上水道は全国的にみられるが、上水道も付けずに4万人の飲み水を井戸水でまかない続けてきた実績を持つ大野のような町は全国的にも珍しいといえる。その稀少価値や、地下水そのものの付加価値を尊重する水行政を求める動きと実際の市の行政の間に衝突がおこっている。小規模な地方都市の活性化に際して、近年の地下水に対する付加価値の高まりが、この町の町づくりにも影響を与え始めた様子である。